

十二類絵巻

【猿の詞書】

よるづの物の中に猿こそ
すぐれたれやな。春は花の
ちらざる、秋は月のくもらざる、
思ふ人にははなれざる、つらきめ
人にはあはざる。巴猿三叫喚
行人の裳をうるをす。
わりなくぞおぼゆる。
わびしらにましらな
なきそと、みつねが
詠しけるも、やさしくぞ
きこゆる。
山王の侍者ども我をぞ
さだめ給へる。年ごとの卯月には、
我日ぞみゆきなりける。大
行事と申は、則我かたちよ。
神護寺の法華会、さるの
孝養とかやな。五百の猿のはてこそ
辟子仏となりしか。
目出度覚ゆる。
やれやれ。



重要文化財 十二類絵巻 巻上 部分

【現代語訳】

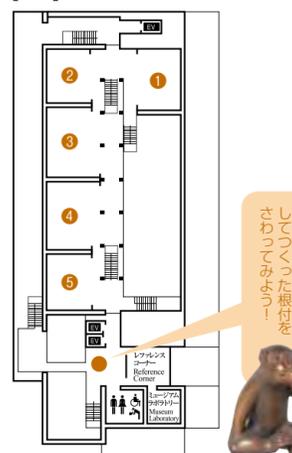
あらゆる物の中で猿こそ優れているのです。
春には花が散らざる、秋には月が曇らざる、
愛する人とは離れざる、つらい目には遭わざる。
夜明け前に幾度も聞こえてくる巴猿の鳴き声を聞いて、旅人が涙で
衣を濡らすという詩は、なんとも素晴らしい感じがします。(※1)
そんなに心細く鳴いてくれるなど、躬恒が猿に詠いかけたというの
も、趣深いことと思われれます。(※2)
山王権現の侍者たちは私をお祀りになり、毎年四月の私(申)の日
には御幸がおこなわれたといわれています。(※3)
大行事権現と申す神様は、言うまでもなく私の姿をしています。(※4)
神護寺の法華会も、猿の孝養をしているとかいうことです。(※5)
五百の猿には、辟子仏(仏教の聖者)になってもらいたいものです。
(※6)
おめでたいことです。やれ、やれ。

【注釈】

- ※1 大江澄明による、和漢朗詠集 所収の詩を指す。
- 胡雁一声 秋城商客歌
- 巴猿三叫 晚堂行人之變
- ※2 三十六歌仙のひとり、凡河内躬恒による、古今和歌集 所収の歌を指す。
- ※3 猿を神の使いとして信仰する日吉大社では、毎年四月の中の午、未、申の日の四日間、日吉山王祭がおこなわれてきた。祭礼の中となるのは「申」の日であるが、歌のうちに毎年行きあったことと必ず記録は逸失しない。ただし勅使は参向していたようである(『国史大辞典』日吉山王祭)。
- ※4 大行事権現は日吉大社の猿社の本物神社の別称で、山王二十一社のひとり。山王曼荼羅に猿身で描かれる。
- ※5 高雄山神護寺で法華経書写をおこなった弘法大師聖徳のころへ、一匹の猿が聴聞に訪れていた。空海は弘法の理に努めるこの猿のために法華経書写をしようと願い、喜んだ猿は誓願(長手)を毎日届けさせた。しかし、ある朝猿が現れない。探してみると、芋を取ろうとして穴に落ちて死んでいた。空海はこの猿のために、法華経講読する法華会をはじめたという。神護寺の法華会は由来を空海との関わりから語るこの説話は、元永元年(一一八)成立の「高野大師御伝」(取載のもの)とも古い例である。絵巻物では、本展示出展の応仁二年(一四六八)成立・高祖大師秘密縁起に収録される。
- ※6 辟子仏は佛者の助けを借りず悟りに至った聖者のこと。別名は縛髻ともいい、猿とはエノコという音に通じている。出家した猿が女房なども袈裟をめぐり、極楽往生を果たすお伽草子「まんがく」がある。また、「度集経」取載の説話には、一族を守った猿の王を仏とし、これに従った五百の猿を比丘(修行僧)とする一節がある。

展示作品一覧

- 第一章 猿と神さま・仏さま ①
十一支像護石拓本 一枚 京都国立博物館
壁面模本 杉本哲郎筆 一枚 京都国立博物館
国宝 日本霊異記 巻下 京都・末迎院
仏涅槃図 一幅 京都国立博物館
重文 十六羅漢像 伝貫休筆 二幅 京都・高台寺
日吉山王垂迹曼荼羅圖 一幅 京都当道会
書面金剛像 一幅
高祖大師秘密縁起 巻九 京都・安楽寿院
日蓮聖人註画讃 蓮田統泰筆 巻五 京都・本園寺
展示期間：12月15日(火)～1月25日(日)
重文 融通念仏縁起 巻上 京都・禅林寺
展示期間：1月2日(日)～1月24日(日)
- 第二章 舞いおどる猿 ②
壬生三面(猿、焼、伯蔵主) 三面 京都・壬生寺
大念仏会狂言作御面版本 一枚 京都・壬生寺
狂言面(猿)一面 京都・壬生寺
重文 十二類絵巻 巻上
重文 融通念仏縁起 巻下 京都・禅林寺
耕作図屏風 狩野永良筆 六曲一隻
盃廻し・狙公図 英一蝶筆 二幅 兵庫・大手前学園
- 第三章 中世水墨画の「牧給猿」 ③
重文 廠樹遊猿図屏風 六曲二双 京都国立博物館
猿蟹図 雪村筆 一幅
猿猴図 筑陽筆 一幅
猿猴図 江戸宗玩賛 一幅
猿猴図 扇面 信俊印 一幅
猿猴図 扇面 伝養拙筆 一幅
重文 雪裡三友図 玉腕梵芳等賛 一幅 京都国立博物館
富嶽図 是庵筆 一幅 京都国立博物館
鷹図 等梅図 一幅



300席のホールで拡大してつくった板付をぜひみてみよう！

第四章 個性の絵師たち 猿を描く ④

- 猿公図 伝牧給筆 一幅
太公望 楊小窗・猿猴図 狩野山楽筆 二幅対
柿に猿及柚子図屏風 六曲二双のうち 京都・西教寺
猿猴図 白隠筆 一幅
猿蟹図 伊藤若冲筆 一幅
猿猴図 曾我蕭白筆 一幅
猿猴図 長沢芦雪筆 一面
群猿・唐子図屏風 長沢芦雪筆 六曲二双
花卉鳥獸図巻 国井応文・望月玉泉筆 一卷 京都国立博物館
- 小特集 猿描きの名手 森狙仙 ⑤
雪中三獸図 森狙仙筆 四面 京都・廣誠院
親子猿図屏風 森狙仙筆 二曲一隻
猿図絵馬 森狙仙筆 一面 兵庫・柿本神社
- 第五章 暮らしの中の猿のかたち ⑥
弘法不思議図巻 明福筆 一帖(二丁図のうち一丁)
偷桃図 齊白石筆 一幅
松下三賢図 江稼圃筆 一幅 京都国立博物館
猿猴捕月透屏 無銘 伝正阿弥 一枚 京都国立博物館
猿猴透鏡 無銘 伝矢上光広 一枚 京都国立博物館
三猿結綿 線刻銘「懷玉」一個 京都国立博物館
瓢箪猿根付 陽刻銘「谷」一個 京都国立博物館
猿廻し板付 線刻銘「正直」一個 京都国立博物館
猿廻し板付 線刻銘「旭齋」一個 京都国立博物館
梅猿猴時給硯箱 一合 京都国立博物館
遊猿図時給小箱 一個

関連土曜講座

「猿へのまなざしー申年にちなんでー」
日時：1月23日(土) 午後1時30時から3時
講師：井並林太郎(京都国立博物館 学芸部研究員)
会場：平成知新館講堂(地下1階)
定員：200名
聴講料：無料(ただし、観覧券等が必要です)
※当日12時より平成知新館1階ランドロビーにて整理券を配布します。定員になり次第、整理券配布を終了します。

京都国立博物館 KYOTO NATIONAL MUSEUM

〒605-0931 京都市東山区茶屋町 527
TEL. 075-525-2473 (テレホンサービス)
ホームページ <http://www.kyohaku.go.jp/>

主な参考文献
廣瀬謙「猿」『ものと人間の文化史』34、法政大学出版局、1979年
R・H・ファン・フォーク『中国のテナガザル』(中野美代子・高橋宣勝訳) 博品社、1992年
大貫恵美子『日本文化と猿』『平凡社選書』154、平凡社、1995年

重要文化財 十二類絵巻 巻上 部分



日蓮聖人註画讃 巻五 窪田統泰筆 京都・本園寺

新春特集陳列

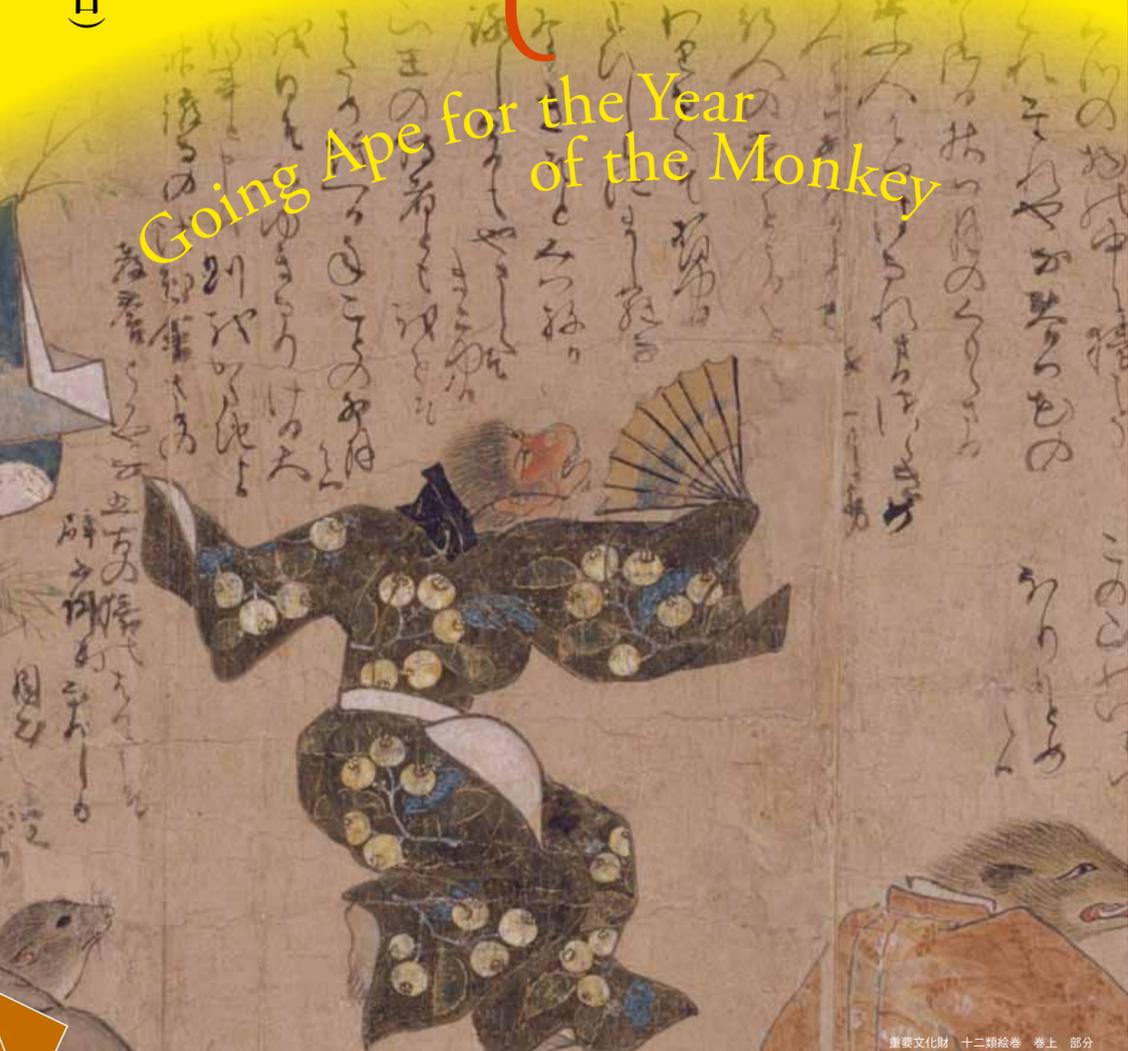
さるくわく

干支を愛でる



2015年 12月15日(火)～1月24日(日)
2016年 1月25日(月)～2月1日(日)
【平成知新館 2F-1-5】

Going Ape for the Year of the Monkey



重要文化財 十二類絵巻 巻上 部分

猿は、李白や杜甫の詩に、哀切沈痛な鳴き声を発する獣として詠われています。この「猿」は大陸に棲息するテナガザルを意味しますが、日本では固有種であるニホンザルのことを表しました。平安貴族は中国の詩人と同じように、その悲しげな鳴き声を自分の心と重ねて和歌を詠みました。十一世紀初めの「和漢朗詠集」には、「猿」の項目が立てられ、すぐれた漢詩と和歌が並べられています。宮廷では詩歌の情景を絵画化した屏風や襖などが用いられていたため、そこには猿の姿も見られたと思われませんが、作品は現存していません。

また、山中に活動するニホンザルは、鹿などと同様に神仏と交信する神聖な獣として信仰されてきました。『日本霊異記』には、滋賀県野洲郡の三上山で修行僧の前に現れた白い猿が、前世は東天竺国の大王であった神と名乗って、法華経を説誦してくれるようお願いする話が収められています。

同じく滋賀県の大津市に鎮座する日吉大社は、延暦寺を鎮護する神社です。そこでは、いつのころからか比叡山に棲息する猿を祭神の使いとしてきました。日吉の神々の姿を示し、礼拝の対象とした日吉山王垂迹曼荼羅の多くには、社殿に上がる階に付近に猿が数匹描かれています。

道教の三尸説に基づく庚申信仰において、除災延命を祈願して、青面金剛の絵や彫像を祀るとき、その足元に三猿（見ざる・聞かざる・言わざる）を配します。この三猿は、天台宗で重視される空・仮・中の三諦と解釈されることもあります。一般的には、人の欠点には目をつむり耳を傾けず、不平不満も言わないという処世術として受け入れられているようです。しかし、庚申信仰と結びついた理由は、はっきりとはしていません。

猿は人間の姿に近いことから、同等の知能をもち仏法を理解するとも考えられました。釈迦の入滅を悲しみ、羅漢に付き添う動物として、涅槃図や羅羅図に猿は必ずといっていいほど描かれています。高祖大師秘密縁起（安楽寿院蔵）巻九収録の、修行中の空海に毎日長芋を届けた猿のエピソードも、仏教に帰依する素質をもった獣として猿を表した例のひとつです。この説話は、古くは十二世紀初めの空海伝に神護寺の法華会の由来として語られており、『法華験記』や『今昔物語集』にも似た話が見られます。

雅な王朝文化や神聖な信仰世界では、猿は情感豊かで深遠・崇高、あるいは人間のように知的な動物として表されてきました。しかしながら、時代が下るにつれ、親しみやすく、滑稽な性格を強調した猿の姿が目立つようになっていきます。

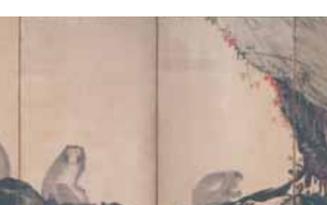
十四世紀初頭の説話集『雑談集』には、民話「猿地蔵」の原型が語られています。そこには、猿が河を渡るとき、袴を上げるように尻毛をかき上げたというおかしな一節があります。猿は滑稽な人真似をする生きものでした。

人間のように振るまう猿といえば、十二世紀末に描かれたとされる鳥獣人物戯画（高山寺蔵、展示しません）甲巻を思い起こす方も多いでしょう。また、十五世紀に成立した十二類絵巻でも、十二支の動物たちが衣装を着て人間のように歌合を催します。絵に描かれた猿は、酔っぱらったかのような赤い顔で舞いおどり、猿を讃える歌を謡います。烏帽子をかぶるのは、外見や言動の立派さに本人の身分や能力が追いついていないことを意味する「猿に烏帽子」のことわざそのまゝの姿です。十二類絵巻は、彩色技術に長けた大和絵を専門とする絵師の作品ですが、筆と墨によって世界を表現する水墨画家も猿の絵を描いています。大陸渡来の水墨画に描かれた猿のほとんどはテナガザルでした。中国に憧れを抱く中世の人々は、見たことのない不思議な姿の猿を愛好します。とりわけ画僧牧谿の描いた観音猿鶴図（大徳寺蔵、展示しません）の猿に代表される、冷たく湿った大気に逆立つ繊細な体毛や、見るものを深遠な境地にいざなうような表情は、禪林を中心にたいへん尊ばれました。

日本の水墨画家は「猿猴捉月」（身の程知らずの望みを持つて失敗すること）などを画題として、牧谿に倣った猿の絵を数多く描きます。しかし、その多くは本家と異なり、明るく健康的な魅力にあふれています。とくに、金色の光たような山間で猿たちが群れをなして遊ぶ情景を描いた式部輝忠の巖樹遊猿図屏風（当館蔵）は、心む温かさに満ちた名品です。



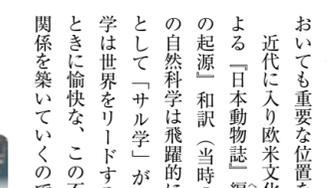
重要文化財 巖樹遊猿図屏風 式部輝忠筆 京都国立博物館



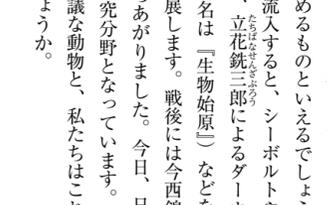
三猿繡繪 線刻銘「猿王」 京都国立博物館



三猿繡繪 線刻銘「猿王」 京都国立博物館



三猿繡繪 線刻銘「猿王」 京都国立博物館



三猿繡繪 線刻銘「猿王」 京都国立博物館

伯藏主

伯藏主